

家族展覽會

家族展覧会 黒井千次

集英社

家族展覧会

定価 二二〇円

一九七九年八月一〇日 第一刷発行

著 者

黒井千次

発行者

堀内末男

発行所

株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

電話 二三〇—六三六一 (出版部)
二三八—二七八一 (販売部)

印刷所

図書印刷株式会社

検印廃止。落丁・組丁本はお取り替えします。

© S. Kuroi Printed in Japan, 1979
0093-772214-3041

家族 展覧会

目次

ゼロ工場より

家族展覧会

91 5

写真 築地 仁
装丁 菊地信義

ゼロ工場より——一幕三場

登場人物

第九工場・第十三生産部

第二十一工作課事務員

〃

〃

〃

〃

海野
絵島

〃

〃

〃

〃

千崎

第二十一工作課作業員

第二十一工作課課長

その妻

早川
和世

第二十一工作課作業員

〃

〃

〃

〃

少年工 1

〃

〃

〃

〃

少年工 2

〃

〃

〃

〃

少年工 3

〃

〃

〃

〃

少年工 4

〃

〃

〃

〃

少年工 5

〃

〃

〃

〃

少年工 6

〃

〃

〃

〃

少女工 1

〃

〃

〃

〃

少女工 2

〃

〃

〃

〃

少女工 3

本社から来た男
荷物を運ぶ作業員

三、四名

奥行き、浅く横に広い第九工場の現場事務所である。正面の壁には立った人間の臍から胸くらの高さにガラスのはめこまれた窓が細長く続いており、そのむこうには鉄骨の上部がのぞき、工場がひろがっているらしい。つまり、ここは工場の中二階に作られた現場事務所である。部屋の中央やや下手よりから、まっすぐ客席の上部にむけておおいかぶさるように巨大な黒い鋼鉄階段がのびている。昇れば一段ごとにガーンと音の響く、むこうが見すかしの階段である。その階段が使われる時、観客は、自分達の頭上をとおって人物達が階段を昇り降りするようを感じてしまう。

上手と下手に、正面にむかってドアが一つずつ。ドアの上ややはなれて、ステレオセットのような二つのスピーカー。

壁の上、高い所に常夜燈が一つ、赤く灯っている。この燈りは劇の進行中は消えることはなく、部屋の中が暗くなると浮き上るように強く光り始める。

机、椅子、ロッカー、時計、黒板、それから上手の壁には大きな工場配置図等、いろいろなものがおいてあるわりにはガラシとした感じ、黒い鋼鉄階段がどうもうっとろしい。

第一場

奥ののぞき窓のむこうから現場の騒音がきこえてくる。大きな金属製品の組立工場らしく、エアハンマーでリベットを打つ断続音、スポット溶接機の音、ポータブルグラインダーの音、叩く音、こする音、圧縮空気の噴出する音、それらの音のむこうから、クランクプレスの鋼板を打つ音が一定間隔でリズムカルにきこえ続けている。

（これ等の音は、現実音でなければならない）

音にあわせて横に長いのでき窓が青白く明滅しながら次第に浮き上り、その奥に工場の鉄骨が深い奥行きをもつて見えてくる。窓の外部が暗くなるのといれかわりに、現場事務所の中は薄明るくなる。

絵島は部屋の中央の机で仕事をしている。作業記録関係の整理から、作業計画の作成へと、その仕事は次第に複雑なものに移っていく。それとともに（その他にも原因はあるわけだが）絵島は次第に苛立って来る。海野は鋼鉄階段に近い会議机の上で青焼きの図面を配布先別にわけている。

絵島 (机から顔をあげずに) 十時になるか。

海野 (うす高く積み上げた図面を机いっぱいにひろげてならべ続ける) 十三分間でこれだけの図面を分類配布しろというのは無理だよな……。

絵島 (同じ調子) 十時になるか。

海野 集成部品の組立図面配布の仕事は、もともと二人でやる計画だよ。ひどいじゃないか。カッパの奴がやめればやめっぱなし、課長が死ねば死にっぱなし。どうなっていくんだい、うちの課は。

絵島 十時まで、あと何分？

海野 減びてしまいますよ、いいんですか。伝統ある第九工場第十三生産部第二十一工作課は減びてなくなりますよ。もっとも、俺はあと半年もなんとかもってくれば、あとはどうなるかと……。

絵島 十時まで、あと何分？

海野 絵島さん、俺ゆうべ、夢みたよ。久しぶりによ……え？ 時間？ 自分で見ればいいでしょ……。(壁の時計をふりむくと、作業していた手が次第に遅くなる) おかしいね。(自分の分類した図面の量と、未整理で積みあげられている図面の量と、壁の時計とをもう一度見較べる) どうもいやにはかどると思ったよ。(時計にむかって呼びかける) 止ったんでしょ。畜生。(近くの机のひき出しをあげ、腕時計をとり出し、耳にあて、振ってみる) これも？……畜生。時計が止ったら、こっちも働かないでいいようにしてもらいたいね。

絵島 十時迄、あと何分あるかってきいているんだよ。

海野 二つも一度に止ってしまふなんて、薄気味悪いね。絵島さんの時計は？ あ、そうか、ドック入りと……。 (机をはなれて絵島の近くにある電話に手をのばした時、待ちかまえていたようにベル。絵島の手が素速く海野を払って受話器をにぎる)

絵島 はい、二十一工作課。……止った？ 組立ラインがか？ (ほっとしたように) 馬鹿野郎！ おまえの作業班は〈時間〉でも作ってるのか。コンベアが動いていれば、時間が流れているということだよ。時計のことは時計屋にまかせとけ。(電話切る) ……俺だって十時をまっているんだ。

コップに白い花がいけてある他は何もない課長机の上の電話が鳴る。絵島、横とびに走りよって電話に出る。

絵島 はい、二十一工作課。いや、第十三生産部です……。混線してるな。もしもし、はいそう、え？ こちら、第九工場、……ええ、止りました。そちらも？ 変ですな、ええ、きいてみます。

海野 (絵島が課長机にかけよった後の電話をとりあげ、何度も同じダイヤルをまわしては切る) 出ないな。出ないな。出ないな。

絵島 早く時刻をきいてみる。

海野 話し中だよ

絵島 どこが？

海野 この電話が。

絵島 この電話？

海野 受話器をとると、もう話し中だ。「話し中」が口の所までつまっているんだよ。

絵島 (不安そうに) 十時になったろうか。

海野 (壁の時計を見上げる) 停電なのかね？

絵島 (自分の手を眼の前でひらひらさせてみる) ついていないじゃないか。

海野 時計だけ……。 (ダイヤルをまわし続けている)

絵島 L十一班の時計もとまったらしい。それから第十一生産部の事務所でも。

海野 (絵島にむいて) なかった！ (受話器をかかえこむようにして) 守衛本部？ もしもし、本部

ですか？ 今の時刻、教えて下さい。事務所の時計が止ってしまったので……。え？ 止った？

もしもし、そのあの大きな大きな、天文台にあるみたいな奴が？ 振子でしょ、あれは。

……。もしもし、全部止った？ 変だなあ、時計に磁気嵐みたいなものがあるのかね……。そう、

腕時計もね……。どうも……。 (下手の電話が鳴り始める。海野をおさえて絵島が受話器をとりあげる)

絵島 はい。もしもし、二十一工作課。え？ 止りました。作業は流れているようですが。え

え、え？ 第九工場です。ゼロ？ それは工場の名称ですか？ 数字の？ ありませんねえ、

何かのまちがいでしょう。そこでは動いているんですって？ 時計が？ それで？……。切れ

た。(いまいましうに受話器をおく)

海野 どこか動いているのかい？

絵島 ゼロ工場とかなんとか……。

海野 交替時間が近づくと、どなたもお疲れです。

絵島 このままでしかし、もし十時が来なくなったら……。

課長机、中央の机、下手の会議テーブルのそばの机、各々の上に置かれた三つの電話が全く同時に鳴り始める。その他にも電話は三本あるので、はじめはどれが鳴っているのかわからずに、二人はやたらに受話器をふりまわす。その最中に下手の細長いドアが開いて、作業衣に安全帽の火村がふらふらとはいって来る。その時、絵島はやつと課長机の電話を、海野は中央の機の電話をとりあげる。絵島、受話器を耳にあてながら、その電話に出ろ、と火村に身振りで合図。火村、しばらくたってからやつと自分の手もとで鳴っている電話に気づきそれをとる。以下、三人の声は同時にいりまじる。傍点の部分の他は重なりあつてきこえなくなつてもかまわない。

電話の応答1 (絵島) 二十一、工作課。え？ は？ 課長？ いや、おりません。……はあ、御存知と思いますが、先月のある晩、急に亡くなりました。……いえ、後は空席に……生産部長の兼任と思いますが……きいております。はあ、机には花を飾って、……いや、白い花です。……はあ、三輪いかつておりまして……ただ、なんとなく……あの、失礼ですが、どち

らの部長でいらっしゃいますか……、もしもし、あの、わたくし、絵島と申しますが、もし……。

電話の応答2 (海野) 違うよ。違うったら、二十一工作課、十三生産部ですよ。ねぼけてるな。違いますよ、こちら、第九工場です。……そんなこと知りませんよ、さあ、きいたことないね。あんた、だあれ？ この内線番号、誰にきいたの？ 今？ 時計止、ちまっています。第九工場ですよ、もちろん……。きいたこともないね、ゼロ工場なんて。ゲロのまちがいじゃないの。こんなところにきかれてもわかりませんよ。……さがせばいいでしょ、自分で。興味ないですよ、俺は……。

電話の応答3 (火村、彼の対応のテンポは他の二人にくらべてひどくゆっくりしている) もしもし、事務所……あ、あのもしもし、事務所の電話だと思うけど、もしもしもし……違うよ、俺は……もしもし……もしもし、あ、あの、もしもし、もしもし、だから、もしもし、(以下繰返しが続く)……もしもし、俺は今来たところですよ。……知らないよ……もしもし今来たところだよ。もしもし、だから、地図が、もしかしたら、もしもし、右の下、右の隅？ もしもし、ただどまだ……もしもし、あの、もしもし、事務所に……あ、あ、もしもし、階段？ もしもし、きいてみるけど……もしもし、いやだよ、もしもし、俺、あの、もしもし、もしも……。(無意識のうちに電話切る)

火村 (既に電話を切って自分の方を見ている絵島と海野の方に顔をあげる。沈黙。それから突然別の工場があるんだって？)